

♪シャブリエ (1841-1894) : 道化の行進

1841年、南仏に生まれたシャブリエは子供の頃から音楽に興味を示し、音楽大学に進む事を希望していました。しかし父親は彼が音楽家になることに猛反対。仕方なく一旦は父の希望通りフランス内務省に就職します。しかし音楽の夢をどうしても捨てきれなかった彼は独学で作曲の勉強を続け、39歳の時遂に脱サラ。作曲家としての活動を本格的に始めます。今回演奏する道化の行進はそんなシャブリエが42歳の時に作曲したと言われるピアノ連弾の為の作品です。

♪ラヴェル (1875-1937) : 序章とアレグロ

原曲はハーブ、フルート、クラリネット、弦楽四重奏の為の七重奏曲。1905年、エラル社が自社のハーブを売り出す為ラヴェルに作曲を依頼したのが発端です。因みにエラル社とライバル関係にあったプレイエル社はドビュッシーに同じような理由でハーブ曲の作曲依頼をしており、同時期にドビュッシーは『神聖な舞曲と世俗的な舞曲』を作曲しています。

♪チャイコフスキー (1840-1893) : バレエ組曲《くるみ割り人形》(作品71a)

実は『くるみ割り人形』の題材をあまり気に入らなかったチャイコフスキー。作曲活動は困難を極めたそうです。依頼主に納期日の延期を願い出る手紙を送ったりしながら1892年、何とか作品を完成させるのですが、その裏にはチャイコフスキーとある楽器の出会いがありました。

『パリで新しいオーケストラの楽器を見つけました。それは小さいピアノとグロックンシュピールの中間のようなもので、神々しい美しい音を持っています。私はこれをバレエ交響詩に導入したいのです』(『胡桃割り人形』論-至上のバレエ 平林正司著より)

それは1891年春、アメリカへ演奏旅行に行く直前の出来事でした。パリで偶然チェレスタの音色を耳にしたチャイコフスキーは急いで友人に手紙を書き、チェレスタを購入するよう頼みます。手紙には「誰にもこのチェレスタを見せないで欲しい、特にリムスキー＝コルサコフやグラズノフに見せてはならない。これは絶対に私が最初に使うんだ」とも書かれていたそうです。当時発明されたばかりだったチェレスタは作中の金平糖の精の踊りで用いられ、それがきっかけで一躍話題となり、後にラヴェルやストラヴィンスキーが用いる楽器となります。

《あらすじ》

舞台はクリスマス・イヴ。少女クララの家ではクリスマスパーティーが開かれ、人形使いのおじさんが子供たち全員に人形をプレゼントしています。クララはくるみ割り人形を受け取りました。その人形は少し不恰好でしたが、クララは一目でその人形が好きになりました。そしてその夜、クララは夢の中でくるみ割り人形と一緒におとぎの国を冒険します。

♪プロコフィエフ (1891-1953) : バレエ組曲《ロミオとジュリエット》より

1936年までの十数年間、フランスを本拠地として活躍していたプロコフィエフはこの作品の依頼を受けた事がきっかけでソ連へと戻ります。「演じ物はすべからく明るく建設的でなければならぬ*」とするソ連当局から咎められる事を恐れ、作曲当初はハッピーエンドでした。しかしシェイクスピアの作品をよく知る人々から反対の声があがり、結局は原作通りの悲劇的結末を選んだそうです。(*日本楽譜出版社『ロメオとジュリエット』解説より)

《あらすじ》

1. モンタギュー家とキャピュレット家

中世イタリア、ヴェローナの街。敵対する名門モンタギュー家とキャピュレット家が争いを繰り広げています。両家は抗争を繰り返し、ついにヴェローナを治める大公が「次に流血沙汰を起こした者は町から追放するように」と命じる事態に。

2. 情景 (街の目覚め)

平穏なヴェローナの夜明け。街は徐々に活気付き、人々が集まってきました。

3. 朝の踊り

広場では行き交う人々が朝から踊っています。みんな思い思いに様々な踊りを踊っています。

4. 少女ジュリエット

場面は変わりキャピュレット家。令嬢ジュリエットは十代前半の娘らしく活発に跳ね回り、乳母を困らせていました。そこへ母親がやってきて今夜舞踏会に招待している大公の息子パリスとの婚姻を勧めます。恋への憧れと不安が芽生え、ジュリエットは戸惑います。

5. 仮面

敵対するキャピュレット家の仮面舞踏会へ忍び込んだロメオと親友マキューシオ。そこでロメオとジュリエットは出会い、恋に落ちてしまいます。

6. ロメオとジュリエット

舞踏会の後、抑えきれない想いを抱えたロメオとジュリエットはバルコニーの下で互いの想いを打ち明け、愛を誓います。しかし敵対する両家が2人の結婚を認める筈ありません。そこで彼らは教会で密かに2人だけの結婚式を挙げる事にしました。

7. ティボルトの死

ロメオとマキューシオが街中を歩いているとジュリエットの従兄弟ティボルトが喧嘩を仕掛けてきました。争いの末、マキューシオを殺すティボルト。親友の死に逆上したロメオはティボルトを刺し殺し、町から追放される身に。ジュリエットはロメオとの別れを嘆き悲しみます。

8. アンティル諸島から来た娘たちの踊り

ロメオとジュリエットの結婚を知らないジュリエットの父は、娘とパリスの結婚を進めていました。婚礼の噂を聞きつけた友人たちはアンティル諸島から来た娘たちをキャピュレット家へ送り込み、祝いの舞を踊らせませす。窮地に陥ったジュリエットは死を装う秘薬を服用します。ジュリエットは死んだと周囲に思わせ、ロメオと逃げる計画だったのです。

9. ジュリエットの墓前のロメオ～ジュリエットの死

キャピュレット家の墓所。埋葬されたジュリエットの元へロメオが駆けつけます。彼女が本当に亡くなったと思ひ込んだロメオは絶望し、毒薬を飲んで自ら命を絶ちます。やがて目を覚ましたジュリエットは息絶えたロメオを見つけ希望を失い、自ら胸を刺しロメオの後を追います。そこへ集まった両家の人々は涙ながらに和解するのです。 (文章 宮川知子)